

WE リーグ元年、 女子サッカーの未来 私たちの将来を考える

開催日 2022年2月23日（水・祝）

主催 （公財）北海道サッカー協会
 主管 （公財）北海道サッカー協会
 女子委員会・技術委員会
 後援 （公財）日本サッカー協会

協力 （公財）日本女子プロサッカーリーグ（WE リーグ）
 アイナックフットボールクラブ株式会社
 株式会社マイナビフットボールクラブ
 株式会社アルビレックス新潟レディース
 株式会社エルフェンスポーツクラブ

主旨：2021年9月に開幕したWEリーグは、女子プロサッカー選手という日本に新しい職業を誕生させただけでなく、その理念である「女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献する。」を実行に移す取り組みが数多く行われています。その設立の意義や理念を知ることとともに、選手だけではなく、WEリーグに関わる様々な立場の女性たちの活躍する姿を知るとは、道内の女子選手が将来を思い描くにあたり、大きな刺激となるものと考え、本イベントを開催いたしました。

開催の経緯：当初、コンサエスポカップにおける附帯事業として女子サッカーデー事業を実施予定でありましたが、コロナ禍において大会が中止となったことで、イベントを再考。同じく実現が難しくなっていた技術委員会主管事業「北海道女子フットボールミーティング」の運営スタッフとともに、オンラインを活用し、北海道の女子サッカー選手のためのイベント開催を一から検討するに至りました。技術委員会のスタッフより、WEリーグを身近に感じてもらうことで、選手のモチベーションを高めたいという声を受け、チームに打診し、メッセージ動画のご提供を得、また、山谷選手にご出演いただくことができました。また、日本の女子サッカーの将来を見据えた戦略として立ち上げられたWEリーグについて、「女性活躍」の前進としても捉えて施策を推進されるJFA女子委員会副委員長の今井氏とWEリーグ理念推進部長・理事の小林氏によるご講演をいただくこととなりました。仲間とともに視聴することで、様々な気付きを得られるよう、各ブロックに拠点をつくってワークショップをまじえたハイブリッドのイベントを目指しておりましたが、オミクロン株の影響によりオンライン事業として実施することとなりました。

視聴数：約200名

13:30 オリエンテーション 司会 中川綾子（公財）北海道サッカー協会 女子委員長

ごあいさつ
 （公財）北海道サッカー協会
 鷲津 裕美 副会長

13:40 ご講演『WE リーグの誕生、設立の意義と理念』 （公財）日本サッカー協会女子委員会副委員長・WE リーグ理事 今井 純子氏



JFAテクニカルハウスの一員として、指導者養成・普及・育成・強化に長年尽力。何事にも真摯な姿勢がスポーツ諸科学への習熟と幅広い人脈形成につながり、現職へ。国体少年女子種目新設やリーグ戦改革、WEリーグ創設など、日本の女子サッカーの堅実な前進を支えている。比較文化論をベースとした人文科学の造詣も深い。

ご発表要旨：

日本の女子サッカーの歴史を振り返りたい。日本が安定した経済の基盤を背景として、様々な方の尽力により、早い段階で日本女子リーグを開催させ、指導者養成等の種まきをしていた。その結果、FIFAワールドカップ過去8回すべてに出場するチームとなったものの、現在、国際的な地位としては伸び悩んでいる状況である。フランスワールドカップは、興行としても成功をおさめた大会であったが、現在、FIFAでは、女性サッカー界におけるプロフェッショナル化するなど発展戦略が議論され、主にヨーロッパを中心に多くの国がプロ化を行い、女子サッカーへ投資がはじまり、世界規模での転換期を迎えている。そのような中で、なでしこリーグは、ほぼ日本人で構成され、多様なサッカーに触れることが少なく、また、代表選手たちもアマチュア選手のみであった。一方、アンダー世代を含め3世代の大会で優勝している国は日本だけであり、若手が育っている今なすべきこととして、WEリーグ開幕に至った。男子もJリーグ以前には、日本代表はまだ世界で戦えるチームではなく、Jリーグ以降に高い競技力を得た。プロ化が必要だと判断した。

WEリーグの名前には、女子が「サッカー選手」を夢みることができる、サッカーを超えて、女性活躍社会の象徴となる、さまざまな人々と協力・共創する、関わる「わたしたち」みんなが主人公になる、そういった想いを込めている。最終的には「女性活躍」という言葉を言わなくともよい社会になるように、WEリーグの理念である「女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献する」を実現させていきたい。このリーグにより、ゲーム環境の強度を高め、女性人材を育てて社会の変化も促すなど、女子サッカー総合的発展の契機にしていこうを目指している。

日本では、「女性活躍」を感じづらく、私自身もそうであったが、日本のグローバルジェンダーギャップ指数が120位/156国であり、正常な状態ではないと思わざるを得ない。日本の女子サッカー界がめざす「なでしこビジョン」においても、芯が強く明るく礼儀正しいなでしこが、女子サッカー固有の価値で、社会の発展を目指すことを掲げており、JFAとWEリーグは、共同で、WE Ps（女性のエンパワーメント原則）に署名した。その実践の一つとして、このあと小林氏が紹介するWEリーグでの取り組みや女性リーダーシッププログラムの開催がある。

WEリーグは、女子サッカーの発展のきっかけの一つ。もちろん、女性だけではできないし、女子サッカーを女性だけのものにしたわけではない。みんなにとって価値のあるものにしていきたい。そして、「なでしこ」らしく、女子サッカーの価値を高め、大きな変化をおこしたい。そして、今視聴されている皆さんの協力も必要。女子サッカーへの関わり方は、選手だけではなく。指導者、審判、運営スタッフなど様々。発展に力を貸してほしい。

女子トップリーグプロ化 "WE League"

- 日本の女性活躍社会を牽引する。
- 日本に「女性プロスポーツ」を根付かせる。
- 日本のサッカーファミリー拡大に貢献する。
- なでしこジャパンを再び世界一にする。

女子サッカーを夢のあるパスウェイに
 地域に密着し、各地域での女子サッカー発展の核として



高瀬 愛実選手
INAC神戸レオネッサ

©INAC KOBE LEONESSA

北見オニオンキッドサッカースポーツ少年団 - アトラス北見中央サッカースポーツ少年団 - 北見リトル・ウィングスサッカースポーツ少年団 - オホーツク FC- 北見フットボールクラブ U-15- 釧路リベラルティ - 北海道文教大学明清高等学校

小学生のころ、道東や帯広のチームと合同で女の子だけで活動する機会があったことが思い出。中高生のころ、道外に出る機会は稀だったが、全国大会ではレベルの高い選手と出会い通用しないことを経験し、北海道に戻ると焦る気持ちもあった。しかし今できることを最大限にやることを心掛けた。

WEリーグ開幕戦でのファーストゴールを獲得した。ゴールできたことだけではなく、これまでお世話になった方に恩返しできたことが嬉しかった。プロ化になり、改めて多くの人に支えられてサッカーができていることを理解した。プロとして人間性を含めて考えて過ごすようになった。北見ではサッカーを続けること自体が難しい状況だったが、指導者の方をはじめ多くの方に支えられてきた。そういった方への感謝の気持ちが大きい。

北海道の女子選手たちへ：サッカーだけではなく、自分の目標や夢を追うことを通じて、多くの人に出会い、多くの経験をして、北海道の大地くらいに大きな人になってほしい。



三宅 史織選手
INAC神戸レオネッサ

©INAC KOBE LEONESSA

真栄サッカースポーツ少年団 -JFA アカデミー福島

小学生のころは、自由がありながら厳しく指導していただいた。中学生から北海道を出て、親元を離れ、厳しい上下関係の中で6年間を過ごし、人間性ととともにサッカーの技術を高めることができた。WEリーグ前半では、浦和戦で竹重選手が得点しものすごく喜んでいて、その試合で勝ち切れたことが一番印象に残っている。WEリーグが開幕して、全チームプロ化になったことで責任感が生まれた。女子サッカーらしい面白いプレーをしなければならないと考え、自分のプレー一つひとつに対して責任感をより持つようになった。一番感謝しているのは両親。常に応援し続けてくれている。親孝行をしなければならないと思っている。近賀選手を一番尊敬している。厳しいが自分のことを思って、厳しく指導をしてくれる。

北海道の女子選手たちへ：環境が良くない中でも、自分の夢を持ち続けられたいと思う。どんな状況でもサッカーを楽しんでほしい。



白木 星選手
マイナビ仙台レディース

©mynavisendai

伏古北 FC-SSS 札幌 -ASCadooma- ノルディニア北海道 - 常盤木学園高校 - 浦和レッドダイヤモンズ・レディース

中学生のときにはじめて女子チームに所属し、小学生のころに学んだ仕掛けや一対一に多く取り組んだ。高校では周りのレベルがあがり、攻撃だけではなく、守備にも力を入れるようになった。アンダー世代の代表にも入り、日々サッカーに打ち込んだ。WEリーグ前半で最も印象に残っているのは、新潟戦。内側に切り込んだシュートは、ずっと練習して、点を取りたい形だった。プロになり、サッカーについて考える時間、練習に集中できる時間が増え、充実している。点を取る意識がこれまでよりも高まり、ゴール前で、シュートやゴールに向かうプレーが増えた。親や家族、北海道でお世話になった選手やスタッフの皆さんにも感謝している。

北海道の女子選手たちへ：チームメイトとのコミュニケーションと諦めない気持ちをサッカーをすることで学んだ。一緒に頑張っていきたい。



小島 美玖選手
ちふれA S エルフェン埼玉

©ELFEN

FC TIPS サッカースポーツ少年団 -JFA アカデミー福島 - アルビレックス新潟レディース

中学生から北海道を離れましたが、北海道では少年団の練習やスクールなどでとにかくボールに触っていました。様々な指導者にサッカーに対する考え方を学んだことが今も活かされている。高校生のころ、ゴールセッティングに一番取り組んでいた。自分はこうなりたいという目標をたて、そこから逆算して何をすべきかを考えていた。なでしこリーグにスタメンで出場するという目標をたて、そこに到達するために自分に足りないものを洗い出した。たとえば、私はヘディングが苦手だったが、なでしこリーグではロングボールが多いことから、サイドバックで活躍するためにはヘディングで競り勝つ必要がある。そのために、3か月後の試合でヘディングで3回競り勝つ、という具体的な目標を立て、練習や自主トレをしていた。この考え方を継続している。

北海道の女子選手たちへ：時間はあっという間に過ぎ去る。一日一日を大切にしたい。同じ練習でも考えながら取り組むと成長の度合い・スピードが違う。後悔しないよう毎日練習に取り組んでほしいと思う。



西川 明花選手
ちふれA S エルフェン埼玉

©ELFEN

札幌西サッカースポーツ少年団 - クラブフィールズ・リンド - 文教大学明清高等学校 - FC 高梁吉備国際大学 Charme - ベガルタ仙台レディース - AC 長野パルセイロ・レディース - 伊賀 FC くノ一三重

北海道にいたころ、道外遠征でフェリーでみんなで雑魚寝したことなどが楽しい思い出。高校では、遠かったが毎日朝練をかかさなかった。上達するために、たくさんボールに触れること。道外に出て、より止める・蹴ることの大切さを学んだ。ここまでサッカーを継続させてくれた親に感謝している。そして、サッカーを通じて出会い、成長させてくれた人に心から感謝している。

北海道の女子選手たちへ：まずは、サッカーを楽しんでほしい。そして、やるからには上を目指していると思うので、楽しみつつも、止める・蹴るの大切さを考えて練習をしてほしいと思う。

WEリーグでは初出場・初ゴールが目標。チームに貢献していける選手になりたい。

オンライントーク

山谷瑠香選手（アルビレックス新潟レディース）



山谷 瑠香選手

アルビレックス新潟レディース

©ALBIREX NIIGATA LADIES

北小樽サッカースポーツ少年団 - 小樽 Ladies FC Corsario
- 北海道文教大学明清高等学校 - 新潟医療福祉大学女子サッカー部代表
質問

文教大学附属高等学校 中島 智香さん

今までで一番辛かったと思ったトレーニングを教えてください。

山谷選手) 走り込みのトレーニングは辛いです。

今まで戦ってきた選手の中で、一番「うまい」と思った選手を教えてください。

山谷選手) うまいと思う選手はたくさんいるが、一番衝撃的だったのは、上尾野辺めぐみ選手。

これまでがんばってきて良かったと思うことを教えてください。

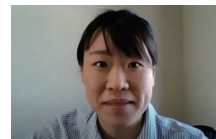
山谷選手) 小さいころから、技術練習に力を入れてきた。北海道は冬が長く体育館などで基礎的な技術練習を繰り返しやってきた。これが今に活きていると感じる。

代表
質問

道東ブロック女子ユースダイレクター 赤間 奈津美さん

中学生や高校生のとき、練習でどのようなことを意識されていたか？上達のために心掛けていたことは？

山谷選手) 自分と同じチームメートや対戦相手には負けたくないという気持ちを持っていた。

代表
質問

道南ブロック普及コーディネーター 浅利 清美さん

WEリーグ前半戦で最も印象に残っていることを教えてください。また、プロ化となり、サッカーを職業とすることになり、意識が変わったこと、プレーで変化したことは？

山谷選手) WEリーグで最も印象に残っているのは、初勝利をしたちふれ戦。プロ選手という立場になり、責任感が強くなった。結果が全てだと思っている。そこを強く感じるようになった。

代表
質問

道北ブロック女子ユースダイレクター 五十嵐 優さん

サッカーをするにあたり、ご自身が大切にされていること、今もっとも感謝している人は誰でしょうか？

山谷選手) とにかく楽しむことを大切にしている。自分が大好きなスポーツだからこそ、楽しまなくては。最も感謝しているのは両親。不自由なくサッカーをさせてもらった。そして、当たり前のようにサッカーをさせてくださっているスタッフの皆さんにも心から感謝している。



司会 理事・女子委員長 中川 綾子

3種・4種の指導や小樽地区での大会運営の経験を現職に活かし、女子サッカー界の様々な変革をチームに寄って推進。中学校教員。



司会の中川女子委員長は、小樽地区のスタッフとして、山谷選手が小さいころからがんばる姿を見守ってきた一人。

山谷選手) 女子サッカーの環境も認知度も向上してきている。道内女子サッカーを盛り上げて、今、視聴されている方がプロになって、一緒にプレーできることを楽しみにしている。

前半戦は勝利が遠いこともあったが、後半戦は、見ている人がワクワクするような試合ができるよう、全員でがんばっていきたい。

本イベントは、女子委員会と技術委員会のメンバーが、共同で企画検討を行い、実現にいたりしました。札幌ブロックユースダイレクターの三澤純子さんは、配信補助や質問の収集にあたってくださっていました。また、主に女性スタッフが中心となって進めましたが、多くの男性スタッフにもご協力をいただきました。

ご講演『WE リーグの理念推進、女性活躍の未来』

WE リーグ理事・理念推進部長

小林 美由紀氏



筑波大学女子サッカークラブ、関東大学リーグをはじめ、大学女子サッカーの礎となる組織・事業の立ち上げに携わる。アメリカ留学時に体感した女子サッカー文化・女性活躍の熱を伝道し続け、スポーツ競技の翻訳・通訳、様々な国際大会でのスポーツボランティア、ジェフレディースマナージャーを経て現職。推進力と行動力の塊で人を巻き込む力はピカイチ。

ご発表要旨：

[ウーマン・エンパワーメントについて] まず、「ガラスの天井」という言葉を覚えてほしい。青い空が見えているのに、女性には見えない天井があるということを言う。男性しかいない場面、女性しかいない場面に違和感を覚えてほしい。当たり前ではない場面があることに気づいてほしい。エンパワーメントとは、自分の良いところ（パワー）を理解して、それをしっかりと表現して伝えることで、自らが自信を持ち（エンパワー）そして、周りにもパワーを与えること。先ほどのWEリーガーのメッセージは、皆さんにパワーを与えたと思う。それがエンパワーメント。オンザピッチ、オフザピッチでエンパワーし、WEリーグの理念を実現することで、世界一のリーグになりたいと考えている。

WEリーグには、チームスタッフだけではなく、審判、実況アナウンサー、解説、カメラマン、ディレクター、トロフィーを作る方も女性。男性が多かったポジションにも女性を増やす取り組みを進めている。皆さんも、選手を目指すのはもちろんだが、スタッフにも関心を向け目指してもらえたら。

[WE ACTIONについて] 私たちが理念を推進する活動をWE ACTIONと呼んでいる。エンパワーしていく活動。一番最初の取り組みは、選手による「クレド（心にかかげる信条・行動規範、標語）」づくりだった。WEリーグの理念をもとにした 11 チームの選手によるディスカッションを経て生まれた。（ディスカッションのダイジェスト映像を放映）そのクレドを開幕戦の選手宣誓とした。「ワクワク」・「愛」といった言葉は選手たちから生まれた言葉。

選手・スタッフに対するジェンダー研修（LGBTQ 等多様な人々を知る）もWE ACTIONの一つ。女子サッカーというダイバーシティ・多様性が認められる環境だからこそ、しっかりと向き合っている。WEリーグは現在 11 チーム。毎節、試合のないチームが 1 チーム発生する。そのチームはWE ACTION DAYとして、清掃活動や女性活躍に関するフォーラム、スクール活動など様々な活動を行っている。この活動の中には誰でもできるものがある。もし、今視聴されている皆さんが同じ取り組みを行うなら、WEの仲間。

私たちは、サッカーが世界を変えていくことを信じている。そして「サッカー選手」を少女たちの夢の職業の一つにしたい。WEリーグに、様々な人が関わり、サッカーだけではなく様々なことを楽しめる場にしていきたい。そしてパワーを与えていきたいと思っている。北海道は、副会長が女性。47 都道府県で 5 人しかいない。優秀な選手だけではなく、多くの優秀な女性スタッフが活躍している。もちろん女性だけではなく男性の力も必要。みんなが主人公になれる環境づくりが大切。一人ひとりが未来に向かって行動し、女子サッカーの仲間が活躍できる環境を一緒につくってほしい。

■クレド開発

- ・選手たちが作った「クレド」
- ・開幕戦の選手宣誓とした



【WE リーグ クレド】

私たちは、自由に夢や憧れを抱ける未来をつくる
 私たちは、共にワクワクする未来をつくる
 私たちは、互いを尊重し、愛でつながる未来をつくる
 みんなが主人公になるためにプレーする

おわりに 「私たち」の将来に向けて



聞き手

公益財団法人北海道サッカー協会

理事 大岩 真由美

2002 年、国際審判員として FIFA 主催大会で日本人初の主審を務める。
 S 級レフェリーインストラクターとして後進の育成にも尽力。

素敵なキーワードが多かったが 3 つだけ心に残った言葉をご紹介します。一つ目は「一人ひとりが輝く社会」という言葉。女性だから、男性だからという区別ではなくみんなが輝くことが大切だということ。二つ目は「フェア」。講師のお二人は旧知の仲だが、いつもフェアな姿勢をお持ちで、審判の存在をリスペクトしてくださっている。そのお二人がつくっていているWEリーグを通じて、近い将来、フェアな社会がくると感じた。最後に「ワクワク」という言葉。自分自身がワクワクすることが大切だと改めて感じた。



聞き手

公益財団法人北海道サッカー協会

副会長 鷲津 裕美

長きに渡り、女子委員長として北海道の女子サッカーの組織・大会を整備し、
 現職。JFA 女性リーダーシッププログラム第 1 期生。視覚支援学校教員

選手の言葉でクレドをつくったことが印象に残った。大切なのは選手一人ひとりがどう感じ、どう行動するのか。今視聴している皆さん一人ひとりがどう感じて、今後どう活かすのかが大切であり、それが今日のイベント成果になるのだと感じた。また、ビデオメッセージを寄せてくださった北海道出身の選手の人間性のすばらしさを感じた。時間の大切さを語ってくださった小島選手の言葉にははっとさせられた。山谷選手が楽しむことを大切にされている姿勢にも気持ちを動かされた。WEリーグで活躍されている北海道出身の方はまだいらっしゃる。パルセイロの大河内選手、国際副審の手代木氏、1 級審判員の稲葉氏、オルカのGMの北本氏など、目標にできる先輩が多くいる。お話をいただける機会をつくりたいと思う。そしてこのイベントに参加してよかったと皆さんが思っていただけあればありがたい。本日のイベントに関わった全てのご関係者の皆さまに心から感謝したい。

アンケートから 高校生を中心に 91 名からご回答をいただきました。熱心な回答が多く、すべての回答の文字数は 18,000 を超えました。

- ・女性に関わりサッカーを通じて 1 人 1 人が輝く社会の実現や発展に貢献するというを理念として活動していることにこれから女性がとても活躍する社会になるといいなと思いました。WEリーグを通して日本そして世界にどんどん女子サッカーを広めていけたらいいなと思いました。
- ・環境を与えてくれた人、支えてくれた人に感謝したいとそれぞれの選手がおっしゃっていた内容聞き、私も一人のスポーツ経験者として初めて北海道の外で試合をした時の感動は今でも覚えていることから、次は指導者として選手に沢山の経験やチャンスを与えられる人になりたいと感じました。サッカーを通して女性が活躍出来る社会が広がるように、高校生ではありますが、サッカーの活動に前向きに取り組み、女子サッカーを始める人のきっかけになればと思います。
- ・もっと女性が活躍できる世の中になって欲しいと思いました。そのために、自分から行動していこうと思います。
- ・選手のみだけではなく審判などという立場でもWEリーグに関わる女性たちの活躍があることを知って、選手だけにとらわれないで色々な面でサッカーに関わっていけるんだという視野も広がったし希望にもつながることができました。

ほんの一部をご紹介させていただきました。

イベント終了後、公益財団法人北海道サッカー協会吉田会長、石井専務理事、鷲津理事を交えて、座談会を開催。今後、北海道の選手たちに何を目標して何を伝えていくのか、未来を見据えて建設的に議論を交わしました。